

# 俱会一処

真宗門徒の墓碑によく「俱会一処」と刻まれている。先に浄土に往生した先達と、同じ浄土に生まれ行く思いを表したものであろう。「往生シマッセ！」や「他力本願はダメ、自力本願だ！」などと迷妄の娑婆では本意とは異なる誤用が平然と通る。仏語である「俱会一処」も同様に、死に別れた家族や知友がいずれどこか天国みたいなところに生まれ再会できると単純に思われているのかもしれない。

もし、そうだとすれば問題である。「死んだら終い」の逃げ口上は論外としても、仏教は因・縁・果の縁起法が前提である。家族といえども別々の人生を歩む。娑婆の迷いは別々である。したがって、行くところも当然異なる。それではなぜ同じところ（一処）にいけると考えるのか。いずれにせよ、娑婆での己を中心に構成された環境を、そのまま死後の世界でも持続したいという願望の投影だ。だから、非業の死を遂げた場合、関係者は災いを恐れ鎮魂することになる。娑婆の迷いはおそろしく深い。

まず、「俱会一処」の出拠から見よう。『阿彌陀經』に、「舍利弗。衆生聞者。应当發願。願生彼國。所以者何。得与如是。諸上善人。俱会一処。舍利弗。不可以少善根。福德因縁。得生彼國。」とある。これは『浄土真宗聖典註釈版』による

と、「舍利弗、衆生聞かんもの、まさに發願してかの國に生ぜん願ふべし。ゆゑはいかん。かのごときの諸上善人とともに一処に会することを得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁をもつてかの國に生ずることを得べからず。」と訳される。阿彌陀仏の願力廻向の働きを通して自覚された欣求浄土の思いにおいて、往生したすべての浄土の仏・菩薩たちと共に一処に遇いませぬと云うことである。人と人の関係ではな



参拝記念証

く、仏と仏の関係である。

俱会一処とは仏縁のあるものが仏の教えを聞き、自らの命の本性を明らかにして、明確になった浄土への思いが同じであるが故に、当然の結果として共に同じ仏果を得るということである。つまり、浄土のさとりに至ると言うことなのである。端的に言うと、浄土とは同族や家族という恩愛の一体感とは無縁の存在である。恩愛を捨てて、無爲に帰するが故に、俱会一処なのだ。それでは真宗門徒の墓碑の「俱会一処」は何故に刻まれるのか。阿彌陀經の説明から推察す

ると、こう言うことだ。先祖代々の家人はお仏壇のお給仕を通して、仏縁に触れ、仏説を聞き、仏書を読み、名号の言われを領解して謝念の念仏を称えさせていた。が故に、限界のある善行功德に頼る執念を打ち捨てて、浄土へ至る思いが心に満たされる。後から行く私も同一の経験を持ち得たからこそ、俱会一処の浄土のおさとりを共有できると言うことだ。

浄土は単に死んだら行くような虚妄の天国ではない。ましてや死別した家族が再会するような場でもない。生死流転の命の本性を見通す仏智の世界である。五濁悪世（生涯）のなかで希有な仏縁に触れ、仏の教えに育てられ、そのような世界に生まれることが確かに確信されたとき、先祖・先達が同様の仏縁をいただいて浄土の菩薩となられたが故に、俱に会うことができる。つまり紛うことのない俱会一処の浄土が領解される。

父の最後の日には口から南无阿彌陀仏・南无阿彌陀仏が漏れでていた。前日にいろいろなことを話した。娑婆の話は尽きることがなかったが、突然、称名が出てきた。その称名の所以を問うと、父は笑いながら野暮なことを聞くなど答えた。また口に念仏が出てくる。信心をいただきたい感謝の念仏かと問うてみた。そんなことはどうでもいい。浄土の念仏だと呟いた。娑婆での怨愛を乗り越えて共に大悲の浄土へ往生させていただくことを静かに喜ぶ姿でもある。そんな浄土に私も生まれたいと思う。